

Title	エマニュエル・レヴィナスのエロスの現象学における セクシュアリティの記述の展望：フロイト精神分析 を通して
Author(s)	古怒田, 望人
Citation	年報人間科学. 2021, 42, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/78347">https://doi.org/10.18910/78347</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 〈論文〉

エマニュエル・レヴィナスのエロスの現象学におけるセクシュアリティの  
記述の展望—フロイト精神分析を通して—

古怒田 望人

## 論文要旨

本論では、晩年のレヴィナスが「開拓すべき展望」と見なしていたセクシュアリティをめぐるフロイト精神分析を通してレヴィナスのエロスの現象学におけるセクシュアリティの記述の解明を試みたい。レヴィナスの批判にもかかわらず、フロイト精神分析のセクシュアリティについての理論はレヴィナスのセクシュアリティのクアな記述を具体化するだけでなく、その記述のある種の全体性に抗する意義をも理解を可能にさせるものである。本論では、この点を主にレオ・ベルサーニの『フロイト的身体』(1986)に依拠しつつ証明することで、レヴィナスのエロスの現象学におけるセクシュアリティの記述をある種の「マゾヒズム」の記述として解釈し、その意義を示す。言い換えれば、晩年のレヴィナスが「開拓すべき展望」としていたセクシュアリティの問題の一端をレヴィナスの内在的、文献学的研究から引き出すと同時に、そのセクシュアリティの記述においてレヴィナスが「展望」として残した事柄の内実を明らかにしたい。

## キーワード

エマニュエル・レヴィナス、セクシュアリティ、マゾヒズム、クア、フロイト精神分析

## はじめに

晩年のエマニュエル・レヴィナス(1906-1995)は、絶えず「性欲なき愛」(ex. Levinas, 1991a, 257)という概念を提示し、彼が『全体性と無限』(1961, 以下TI)に至るまで固執していた生殖概念すら放棄している。しかし、1988年の「他者、ユートピア、正義」と題されたインタビューにおいて彼が中期まで取り組んでいた「セクシュアリティ」の問題が「開拓すべき展望をいくつも開いている」と述べている(cf. Levinas, 1991a, 258)<sup>1)</sup>。

では、なぜ主体が抱く性の欲望である「セクシュアリティ」という言葉をレヴィナスはあえて用いたのだろうか。というのも、先行研究においてレヴィナスのエロスの現象学に関する研究は「愛」のような倫理的関係性の延長線上で議論されてきており、レヴィナスのセクシュアリティの記述はそれ自体としては主題化されてこなかったからだ<sup>2)</sup>。そこで本論では、フロイト精神分析を通じた、レヴィナスのセクシュアリティの記述の解明を試みたい。確かに、フロイトはセクシュアルな快楽を「分析の出発点とはしていても、それ自体としては分析していない」と、レヴィナスはエロスの現象学の発端の著作である『時間と

他者』(1948, 83, 以下TA)よりフロイトの立場を批判している。しかし、以下で見るようにフロイト精神分析のセクシュアリティについての理論はレヴィナスのセクシュアリティのクシアな記述を具体化するだけでなく、その記述のある種の全体性に抗する意義をも理解を可能にさせるものである。本論ではこの点を証明することで、レヴィナスのエロスの現象学におけるセクシュアリティの記述のある種の「マゾヒズム」の記述として解釈し、その意義を示す。言い換えれば、晩年のレヴィナスが「開拓すべき展望」としていたセクシュアリティの問題の一端をレヴィナスの内在的、文献学的研究から引き出すと同時に、そのセクシュアリティの記述においてレヴィナスが「展望」として残した事柄の内実を明らかにしたい。

本論は次のように展開する。第一節では、初期から後期を通してみられるレヴィナスのセクシュアリティの記述を概観し、彼の記述が非性器中心主義的かつ両義的な体験の記述であることをレヴィナスの内在研究から示す。第二節では、レヴィナスのフロイト批判の背景に、ナチズム批判にまで連なるある種の決定論批判があることを文献研究並びに先行研究から明らかにする。続いて第三節では、レオ・ベルサーニの『フロイトの身体』(1986)を軸にフロイトの『セクシュアリティ理論についての三篇』(1905, 以下DAS)を精読し、フロイトのセクシュアリティ論が決定論ではないどころか、むしろレヴィナスのクシアなセクシュアリティの記述と呼応するものであることを示す。そして、第四節では前節で得られたレヴィナスのセクシュアリティの記述のマゾヒズムの解釈を基に、レヴィナスが晩年に見出していたセクシュアリティの「展望」を時間性の側面から具体化しその一端を示す。

## 1. レヴィナスのセクシュアリティの記述のクシア性と問い

本節では、レヴィナスのクシアなセクシュアリティの記述を初期から後期まで横断的に概観する。そして、この概観を通して見えてきたレヴィナスのセクシュアリティの記述の構造に対して幾つかの問いを立てる。

レヴィナスが公的かつ具体的にまず記述したセクシュアリティは1947年の『実存から実存者へ』(以下、EE)における「同時に「食べること」の滑稽で悲しいまね事がキスすること、嘔みつくことのうちにはある」(EE, 66)という「口」であり、その後主にレヴィナスが記述するセクシュアリティは「愛撫=ペッティング(caresse)」である。特にTIにおいては、「繁殖性」という生殖を喚起させる概念が幾度となく論じられながらも、レヴィナスは「性欲(concupiscence)」(TI, 285)には言及しても、一度として「生殖行為」には触れていない。そして、AEに至ると、このクシアなセクシュアリティの体験は「皮膚」として記述されるようになる。

主体性のうちには、非・場所という測りがたいものがある。愛撫=ペッティングとセクシュアリティのうちには、触れることの「エスカレーション」がある。その触れることのエスカレーションはあたかも段階を踏んだものであるかのようだが、増大する触れることは内臓たちの接触到一気に至る。皮膚が別の皮膚の下に入り込むのだ(AE, 8)。

このようなレヴィナスの記述から分かることは、レヴィナスのエロスの現象学は一貫して非性器中心主義的なもの、異性愛規範が性愛の軸として前提としているような性器の挿入行為と生殖という特定の身体の部位に従属したセクシュアリティからは逸脱した＝クィアなものだということだ。

加えて、この一貫した非性器中心主義的なセクシュアリティの記述はある種の両義的な現象を常に引き出している。以下の記述を参照されたい。

皮膚の柔らかさ、それは接近するものと接近されるものとの食い違いそのものであり、この食い違いは相違、非志向性、非目的性である。その結果、愛撫＝ペッティングの無-秩序が、[...] 現在なき快楽、つまりみじめさが、苦痛が生じる。近さ、直接的なもの、それは他者を通して享樂すると同時に苦しむことである (AE, 114)

愛撫＝ペッティングという皮膚の体験（「近さ」、「直接的なもの」）は、このように、「志向性」や「目的性」、「秩序」といった同一化作用が受動的に解体されつつ、快苦が同時に体験される両義的なセクシュアリティの体験とみなされる。

このセクシュアリティにおける受動性と快苦の両義性はTIの「エロスの現象学」において既にみられ、レヴィナスが記述するセクシュアリティの構造に通底している。レヴィナスは以下のように「官能」というセクシュアリティを記述する。

心動かされること (*attendrissement*)、つまり苦痛を欠いた苦痛としての志向は、自分の苦痛のうちに喜びを見出して、すでに慰められている。心動かされることは自己満足する同調、快楽、幸福に変わった苦痛である、そしてこれが官能である。(TI, 290、下線は引用者)

レヴィナスにおいて「官能」というセクシュアリティは快楽を一義とするものではなく、「自分の苦痛のうちに喜びを見出して」いるような快苦を共にする両義的な体験なのである。そしてこの「官能」は、「私の官能が他者の官能を享樂するがゆえに」、「他者が私を愛する時にのみ、私は十全に愛することができる」(TI,298)、言い換えれば「傷という受動性からほとぼしる愛」(TI,309)と極めて受動的に記述される。同著の「エロスにおける主体性」での言葉を借りれば「自我の快楽、自我の苦痛」とは「他者の快楽についての快楽」(TI,304)なのである。

このように見てゆくと、レヴィナスのエロスの現象学において一貫して見られる非性器中心主義的なセクシュアリティの記述は、受動性と快苦の両義性というある種の「マゾヒズム」の体験と連関していると言える<sup>3)</sup>。

加えて、このような受動性と快苦の両義性という観点において官能は「すでにエロスの欲望 (*désir érotique*) の内で生じており、そしてあらゆる瞬間に欲望であり続ける」と記述される (TI, 290, 強調は引用者)。レヴィナスはマゾヒズム的な欲望を、TIの冒頭から強調される欲望の満たされることのない高まりからなる「形

而上学的欲望」(TI,22)のセクシュアルなあり方だとみなすのだ。それ故、レヴィナスのマゾヒズム的なセクシュアリティの記述はセクシュアリティという欲望そのものの構造の記述の一つの試みと見なすことができる。そしておそらく晩年のレヴィナスが「愛撫=ペッティング」の「無-秩序」という志向性や目的性によって閉じられることのない「現在なき快樂」という特異な概念を記述したのも、TIで見られるような現在の欲望によって満たされず尽きることのないセクシュアルな欲望を晩年も見出し続けていたからだと推察される。

確かに、上記のようなレヴィナスのセクシュアリティをめぐる誇張的な記述は、レトリカルな比喩でしかないように見える。しかし、後期レヴィナスは「誇張法(hyperbole)」をある種の方法論と見なしている(Levinas,1982,141-142)。それは一つには、上記のように「自己措定(se poser)」が口、愛撫=ペッティングから皮膚にまで至るような「エスカレーション」という「誇張」を介して「自己暴露(s'exposer)」というある種の主体の解体の体験としてあぶり出され記述される方法論である(ibid)。ゆえに、レヴィナスのマゾヒズム的なセクシュアリティの記述はそれ自体「誇張法」を介して引き出された体験として問いの対象となりうる。

そこでレヴィナスの上記のセクシュアリティの記述に対して、次の三つの問いが提起できる。1)なぜ非性器中心主義的=クィアなセクシュアリティがマゾヒズム的体験と結び付けられるのか、2)なぜマゾヒズム的体験は「エロスの欲望」というセクシュアルな欲望そのものとして記述されるのか、3)そして、AEに至って「現在なき快樂」としてレヴィナスが見出したこのような源的なセクシュアリティの「展望」とは何なのか、この三点である。そのために、クィアなフロイト精神分析のセクシュアリティについての理論を参照したい。しかし、その前にレヴィナスがなぜフロイトを絶えず批判し続けたのかを見る必要がある。この点を經由することで、レヴィナスがどのような点でフロイトを批判し、またどのような点でその批判とは異なったフロイトの側面があるのかが明確化される。

## 2. 生物学決定論者としてのフロイト？

本節では、レヴィナスのフロイト批判の文脈を文献学的に探ってゆく。そこから、レヴィナスがどのような点でフロイトを批判していたのかを示すと同時に、その批判とフロイト解釈との間の齟齬を指摘する。

レヴィナスは *Leçon talmudique sur la justice* (1974) の中で「エディプスコンプレックス」を「概念としての異教」とみなし、精神分析は「現代の感性において一神教が激しく破壊されていることを示すもの」(Levinas, 1991b, 104)だと批判している。なぜ、晩年のレヴィナスは精神分析をこのような文脈で批判したのだろうか。

この点に関してレヴィナスは、*Et Dieu créa la femme* (1977) の中で「病において精神分析が発見したような苦痛(Le Mal)は歪曲された罪責(responsabilité)によってすでにあらかじめ決定づけられている(pré-déterminé)ものだろう」(Levinas, 1977, 129)と批判的に述べている。つまり、レヴィナスはフロイト精神分析をある種の決定論として批判しているのである。このようなレヴィナスの決定論的な科学への批

判は、渡名喜庸哲が論文『『全体性と無限』におけるピオス』(2014)でTIにおいて数少ない原注で取り上げられるドイツの哲学者、クルト・シリングの思想を中心に分析しつつ述べるように、1934年の論文「ヒトラー主義哲学についての若干の考察」にまで遡ることのできるものである。この論文の中でレヴィナスは以下のようにヒトラー主義哲学を理解する。

何もその決定的なものという悲劇的な味わいを変えることができないような合一。

[...] 生物学的なものが、それが含み持つあらゆる宿命をともなつて、精神的な生の単なる対象以上のものとなる。生物学的なものが、この精神的な生の核心となるのだ。血という神秘的な声、身体が謎めいた運搬物となるような遺伝や過去への呼びかけ、これらはこの上なく自由を有した「自我」が解決する問題として委ねられた問題という性質を失うのである。(Levinas, 1994, 30, 下線は引用者)

このようにレヴィナスの決定論批判は、遺伝や血といった身体の生物学的な要素によって決定されることへの「生物学決定論批判」と定義することができる。確かに、DASを素朴に読み取った場合、フロイトは性器的段階を「正常」、「最終形態」と捉え、その目的を「生殖」とみなすという系統的な主張(DAS, 98)をしており、特定の形態学的身体を真理とするような「生物学決定論」との誹りを免れることはできない。このためレヴィナスは「自我と全体性」(1954)において精神分析におけるエディプスコンプレックスのような概念を「神話への回帰」と非難し、「四千年にわたる一神教の歩みが人類を神話の強迫観念から解放することのみを目標としていた」ことへの逆行だと述べるのだ(Levinas, 1991a, 44-45)。晩年のレヴィナスが精神分析を異教と形容したのは、「神話」という決定論、マリリュイズ・ニューハウ(Marieluise Neuhaus)に従うなら「アリア神話」(Neuhaus, 2005, 40)というヒトラー主義哲学の「生物学決定論」に連なるもの、セクシュアルな身体についての「優性思想」と見なしたからなのである。だからこそ、このような決定論に抗してレヴィナスは終始身体の特定の部位に決定されてしまうことのない非性器中心主義的なセクシュアリティを記述し続けたのだ。

しかし、本当にフロイトは「生物学決定論者」なのだろうか。なぜなら、1914年に書かれたDASの第三版へのまえがきの中でフロイトははっきりとこの著作が「系統発生的な発達」ではなく「個体発生的な発達」に依拠していること、そして何より「生物学的研究には依拠して」おらず、逆に「生物学だけでもとづくものから著しく外れた意見や結果をもたらすことになった」、と述べているからだ(DAS, 31-33)。ジョン・K・ノイズは実際、『服従という優越：マゾヒズムの発明』(1997)の中でフロイトは「生物学的必然対文化洋式」というそれまでマゾヒズムを概念化する際になされていた二項対立に「真剣に疑問を投げかけた最初のマゾヒズム理論家」だと述べている(Noyes, 1997, 141)。このようなフロイトのセクシュアリティ論解釈とレヴィナスのフロイト批判との間の齟齬をどのように理解すればよいのだろうか。次節では、DASのクィア的側面、そしてレヴィナスのセクシュアリティの記述との関連性を論じたい。

### 3. セクシュアリティそのものとしてのマゾヒズム

本節では、ベルサーニの『フロイト的身体』を軸として、フロイトのセクシュアリティ論のセクシュアルな身体についてのクィア性、並びにレヴィナスのセクシュアリティの記述との連関性を示したい。そこから、第一節で提起した問いへの回答を幾つか提示する。

ベルサーニは、セクシュアリティは系統的に性器的段階に従属しているというDASの通俗的で決定論的な解釈を退け、DASにおけるフロイトの主張とは「セクシュアリティは——少なくとも、それが構成されている仕方において——マゾヒズムと同義のものとして考える」(Bersani, 1968, 67)ということだと述べる。この主張を引き出すために、ベルサーニはDASにおけるセクシュアリティの理論がある種の「不快」の「反復」という運動についての理論であることを明らかにしようとする(Bersani, 1988, 34-35)。

ベルサーニのフロイト解釈に従えば、私たちのセクシュアリティは「前的快感」と「最終快感」という「セクシュアリティそのものの二つのまったく異なった存在論」に分類することができる(Bersani, 1986, 33)。後者が男性性器に依存した「排出あるいは緩められた緊張」(Bersani, 1986, 32)という「セクシュアルな満足感(satisfaction)」(Bersani, 1986, 33)であるのに対して、前者はこのような性器中心ではない「セクシュアルな興奮=高揚(excitation)」(ibid)である。この「セクシュアルな興奮=高揚」からなる「前的快感」は、フロイトが前性器的な幼児期のセクシュアリティの領域とみなした「性源域(erotogenic zone)」に属する。「性源域」とは、幼児期における愛撫＝ペッティングからオーラルセックスに連なるような拡散的で口腔的な行為の一つには分類される(DAS, 82-95)。性器中心ではないセクシュアルな身体性に「性源域」は位置している(DAS, 102)。

ところで、この「性源域」に属する「セクシュアルな興奮=高揚」において「不快」が前景化することをフロイトはDASで強調している。

性的に興奮したときの特徴である緊張については、一つの問題がつきまとっている。困難な問題ではあるが、それだけにまた、これを解決することは性的過程を理解するうえで重要である。[…]わたしは[…]、緊張感には不快という特徴がまわりついているはずだという意見をしっかりと守り抜くつもりである。(DAS, 110, 下線は引用者)

なぜ、フロイトはこのような「不快」を伴うような「緊張感」として「セクシュアルな興奮=高揚」を語るのだろうか。ここで、ベルサーニはセクシュアリティに固有の「反復」運動の構造をDASから引き出す。フロイトによれば幼児期を過ぎたセクシュアリティにおける「対象発見とは本来、再発見」(DAS, 112)、言い換えれば、前性器的な性源域にその欲望の対象を再び見出すという循環である。例えば、口腔的行為における乳房という源的なセクシュアルな対象への関係性は、さまざまな口腔への刺激(例えば「キス」として、「反復」される(DAS, 83-84)。しかし、この性源域に属するセクシュアルな対象の「再発見」という「反復」のプロセスにおける「わたしたちが驚くべきほどに信頼している最初の対象のありようほど、

フロイトにあって不確実なものはない」(Bersani, 1986, 35, 強調は引用者)。なぜなら、性源域において「対象とどう関係するか」は問題となっても、幼児は「セクシュアルな対象を知らない」(DAS, 85)からだ。対象へと向かうリビドーはあっても、幼児にとって対象それ自体は「恋愛対象」のような明確なものではない。それゆえ、「対象リビドーは特異な緊張関係の中で宙に浮いたまま保持される」(DAS, 117)<sup>4)</sup>。セクシュアリティは、このような曖昧な対象との関係性ゆえに満たされることなく、ただ性源域におけるセクシュアルな対象の「再発見」という仕方では身体的に「反復」されるのだ。このような「反復」という運動から、ベルサーニは前性器的な性源域の段階は性器的な段階に「統合」されるという決定論的なフロイトのセクシュアリティ論解釈を退ける。そして、セクシュアリティにおけるこの反復に伴うとされた「不快」を以下のようにベルサーニは言い換え分析する。

源的には、セクシュアリティは挫折の経験から切り離すことができないのである。言い換えれば、過去(幼児期=性源域)における欲動的な快楽の可能性は、すでに、そして始めから苦痛の現実と切り離すことができないものであり、その現実飲み込まれる[……。]人間のセクシュアリティとは、ある種の心の動揺、自己の安定性と揺ぎ無さに対する脅威として構成されている[……。]セクシュアリティはマゾヒズムから切り離すことができない。幼児期のセクシュアリティにともなう苦痛にみちたもろもろの不一致は、消滅へと単純に行き着くどころか、現実には、そのような苦痛にみちた不一致の連続と力に寄与している。(Bersani, 1986, 60-61, カッコ内は引用者)

セクシュアリティは、性源域に属する対象との曖昧な関係性ゆえに絶えることのない「反復」という「挫折」ないし「不一致」と切り離せない。それゆえ、性源域に属する「セクシュアルな興奮=高揚」は、そういった「挫折」や「不一致」が喚起する「苦痛」(「不快」)を伴った「緊張感」として反復される。そこから、セクシュアリティを「自己の安定性と揺ぎ無さ」が瓦解するマゾヒズムとベルサーニはみなすのだ。

以上のような分析を基に、ベルサーニはフロイトが1924年に追加した注のなかで「マゾヒズムに関するわたしの判断は大幅に変更されてしまった」と述べ、生物学的に理解されていた「女性的マゾヒズム」と超自我によって抑圧的に形成される「道徳的マゾヒズム」とは全く異なった「一次的な——性源的な——マゾヒズム」を論じていることに注目する(DAS, 61)。フロイトは、最終的に、性源域における「反復」が生じさせる「苦痛」という「緊張感」、そしてそれに伴う自己解体を「一次的なマゾヒズム」と呼び、セクシュアリティと切り離すことのできないものとみなすのだ。このようなマゾヒズムの現れは、具体的には、口腔的体験において食べることが「満足」になるのに対して、キスや噛んだりするセクシュアリティは充足しないがゆえに反復され、自らの「皮膚」(DAS, 82-85)そして、「内臓の諸器官」(DAS, 86)にまで向かう非性器中心主義的な現象として記述される。

このようなクシアなフロイトのマゾヒズム論解釈を介すると、第一節で提起したレヴィナスのセクシュアリティへの記述への問いに対して二つ回答することができる。まず、「口」、「愛撫=ペッティング」から「皮膚」にまで連なる非性器中心主義的なセクシュアリティがマゾヒズムと結びつくのは、このような性源域



的=口腔期的体験は、曖昧な対象との関係性ゆえに「反復」され続ける「苦痛」を伴った両義的なセクシュアリティだからである。次に、レヴィナスがこのようなマゾヒズムの体験を「エロスの欲望」として記述したのは、マゾヒズムがまさにレヴィナスの記述する尽きることなく反復される「欲望」のセクシュアルなあり方だからである。実際、ベルサーニはフロイトのマゾヒズム論を「現象学的」見地からも捉えており、マゾヒズムは現象学的には「欲望の著しい反復」(Bersani, 1986, 95)であるとしている。このように、レヴィナスの徹底した精神分析批判とは裏腹に、レヴィナスのセクシュアリティの記述は、フロイトのセクシュアリティ論のクィア的な読みと呼応しているだけではなく、その読みから具体化することが可能なのである。

では、フロイトからレヴィナスを読み込むマゾヒズムとしてのセクシュアリティ論にはどのような意味があるのだろうか。フロイトのマゾヒズム論の意義を、ノイズは以下のように記している。

[...] フロイトの一次的マゾヒズム理論は、生命発生の負の弁証法となる。そこでは、主観的経験を全体化するための構成物は、構成の段階ごとに自己破壊の空想に突き崩され、崩壊させられる[...]。 [...] 主観性が完成する全体性の虚構をうまく完結させようとするのなら、マゾヒズムは抑えつけられなければならない。(Noyes, 1997, 149)

マゾヒズムは、全体性という暴力=虚構を破壊するセクシュアルなありようなのだ。村上靖彦がTIの「エロスの現象学」は「倫理の後を付け足さなければいけなかった」からこそ求められたのではないかと述べているように(合田、村上, 2012, 42)、それが経験的なものであれ、形而上学的なものであれ「汝、殺してはならない」というバーバルなものを基礎とした「顔」という「倫理」のみでは、レヴィナスがTIで「顔の彼方」の問題とする(TI, 284)「死」による主体の疎外という全体性を乗り越えることはできない。だからこそ、「死」を疎外された仕方ではなく、「自己破壊の空想」としてセクシュアルな仕方で身体的に体験することで、「死」という全体性を突き崩すマゾヒズムが「顔の彼方」の水準で記述されたのだ。

では、晩年のレヴィナスがセクシュアリティのうちに見出した「現在なき快樂」というセクシュアリティ「展望」の一つは、このようなフロイト的マゾヒズムの観点を介したときどのように立ち現れてくるのだろうか。

#### 4. 時間の身体的意義としてのマゾヒズム

本節では後期レヴィナスがマゾヒズムの体験を記述するために参照した「現在なき快樂」という概念の分析を介して、晩年のレヴィナスが感じ取り問いとして残したセクシュアリティの「展望」の具体的な現れの一部を垣間見たい。

レヴィナスは「他者・ユートピア・正義」の中でセクシュアリティがさらなる「開拓すべき展望」を持つことに触れた後、現在の彼にとって重要なテーマは「時間の観念の脱形式化」だと述べている(Levinas,

1991a, 263)。後期レヴィナスが「現在なき快樂」という特異な概念に仮託して記述しようとした事柄は、このようなマゾヒズム的なセクシュアリティが時間に対してもたらず脱形式化のセクシュアルなあり方なのではないか。というのも、エロスの現象学にレヴィナスが着手したTAから通底しているテーマは、この講演の冒頭で「問われているのは時間についての私たちの観念ではなく、時間そのものなのだ」(TA,17)と述べられているように、「時間」という現象の具体化にあったからだ。この点を初期にまで遡って一つ一つ明らかにしたい。

まず、「現在なき快樂」の「現在」とは何を意味するのか。初期レヴィナスの文脈では、物質的な身体としての自己へと決定的に結び付けられている主体のイメージとして「現在」は記述される。以下のようなTAの記述を見てみよう。

現在は、自己自身への不可避的な回帰のうちに存している。実存者が措定されたことの代償は、実存者が自己から離脱できないという事実それ自体のうちにある。実存者は自己を配慮する。自己を配慮するこの仕方——それが主体の物質性である。(TA,36)

そしてこのような物質性をレヴィナスは「孤独の悲劇を構成している実存の決定的なもの (TA, 38, 下線は引用者)」だと述べる。ここから分かるように、第二節で見てきたようなナチズム批判や精神分析批判においてレヴィナスが想定していたある種の決定論的な身体性が「現在」のイメージなのである。そして「アーリア神話」という優性思想にまで連なっていたこの決定論が依拠している「有用性」を突き崩すものとして、レヴィナスはマゾヒズム的なセクシュアリティを同時期に記されたと思われる小説『エロス』の草稿の中で捉えている。

髪の毛のもつれを解くための櫛、これは、釘を打つためのハンマーや、パンを一切れ切り取るためのナイフと同様に必要なものであり[...] こうした有用なものはもはや、道具=有用物 (ustensile) としてもっともな本質を何も持ちしなかった。これらの有用なものは、もう一つの本質によって貫かれ、覆われ、エロティシズムのカニバリズム的世界へと導かれたのである。それらは、そのもっとも物質的な実質において、もう真面目なもの (sérieux) ではなかった。(Levinas, 2013, 50-51)

ハイデガー的な道具連関の有用性、その「真面目なもの」という全体性は、「エロティシズムのカニバリズム的世界」という口腔的な体験の中で瓦解する<sup>5)</sup>。この問題系は、TIの「エロスの現象学」でエロスの水準では「すべての真面目なものが不在」(TI,295)であり、エロスは「真面目なものを全く欠いた水準へと導く」(ibid)と記述されていることから小説という枠組みの外部でも、そして初期以降も受け継がれているセクシュアリティの文脈である。では、このような決定論的な身体性としての「現在」のない「快樂」というマゾヒズムは、晩年のレヴィナスの「展望」である「時間の観念の脱形式化」の文脈でどのような役割を演じるのか。

ノイズによればマゾヒズムの技術とは「主体が死んで空想が打ち切られることでもなく、執行者がマゾヒストの演じられた空想に参加するのを拒否して空想を打ち切ることでもなく、その両者の中間に空想を宙ぶらりにしておく技術」という両義的な技術(Noyes, 1997, 161)であるという。そしてノイズは、フロイトとその弟子であるテオドール・ライクに依拠しつつ、このマゾヒズムの技術について以下のように述べている。

苦痛が避けられないという認識をマゾヒストは逆手にとって、主体の時間性を操作し、そのようにして期待のサスペンスを引き伸ばしながら、それにより不快への期待のなかの快感という矛盾を作り出すのである。言い換えれば、時間——したがって歴史自体——の絶対的支配という看板のもとであっても、マゾヒストと彼自身の歴史性との関係性が上演されるのである。歴史のユートピア的神話がひっくり返されて、現在という契機のユートピア主義が演じられる […]。(Noyes, 1998, 186)

マゾヒストは「アéria神話」のような有用性に基づいた大文字の歴史という全体性（「歴史自体」）によって「現在」に抑圧された身体的时间性を、死の苦痛という「不快への期待のなかの快感」という両義的な技術を介して操作し、その神話を主体が個別的に生きられる身体的時間へと変えるのだ。ベルサーニが提示したマゾヒズムという「自己の安定性と揺ぎ無さ」の瓦解は、単なる主体性の解体ではなく、系譜学的に構築された性的身体の時間を書き換えるような運動なのである。

以上から、晩年のレヴィナスがセクシュアリティの中に見ていた「現在なき快樂」という「展望」の一つは、マゾヒズム的体験を介し神話のような全体主義的な時間に抗して、主体が個別性を保って生き延びることのできる快樂の時間を身体の水準で体験することだと推察される。というのも、レヴィナスがエロスを介した「時間」というテーマの根底で終始記述しているマゾヒズム的なセクシュアリティの体験は、フロイト精神分析のクアな解釈を介するのならば、全体性に還元された時間を主体の身体的快樂の時間として個別化し受肉させる「脱形式化」だからだ。

確かに、一見するとマゾヒズムが描く「現在という契機のユートピア主義」は享樂の現在に拘泥し再び歴史という全体性の中に組み込まれるかのようにみえる。しかし、「ユートピア」が「どこにもない場所(u-topia)」である限りで、「現在という契機のユートピア主義」の「現在」は、常に未来である＝全体性の外延であるどこかを、全体性に組み込まれた現在とは別の水準を指し示している。レヴィナスもこのようなユートピアとしての時間性を初期のセクシュアリティの記述においてなしている。

愛撫＝ペッティングは苦しみの瞬間そのものに関係するのであり、苦しみはこのときもはやそれ自己自身には繋ぎとめられず、愛撫＝ペッティングの運動によって「ここではないどこか(ailleurs)」に誘われ、「自己自身」の万力から解放され、「新鮮な空気」を、ある種の次元とある種の未来とを見出す。あるいはむしろ、愛撫は単なる未来以上のもの、現在が一つの呼びかけを享受するような未来を告知する。(EE, 156)

「ここではないどこか」、「未来以上のもの」へと愛撫＝ペッチィングは主体を誘い、その「苦しみ」を「自己自身」という「現在」、その決定論的な全体性とは別のユートピア的な水準に連れ出す。そして、TIのレヴィナスに従うのなら、このような愛撫＝ペッチィングはエロスにおける「飢えの絶え間ない増大」というマゾヒズム的な欲望に裏打ちされている(TI,288)。晩年のレヴィナスが「他者・ユートピア・正義」でセクシュアリティの「展望」の一つとして残したことは、このようなマゾヒズム的セクシュアリティが引き起こす全体性の時間に回収されることのないユートピア的な「時間の身体的意義」の体験という「現在なき快樂」なのである<sup>6)</sup>。

## おわりに

本論ではレヴィナスのエロスの現象学において通底するクシアな記述を概観し、その記述が、逆説的にもレヴィナスが批判し続けたフロイトのマゾヒズム論と照応するものであることをみた。この分析から、レヴィナスのマゾヒズム的なセクシュアリティの体験の記述が、生物学決定論やそれに基づく有用性という全体性の時間に回収されないような、主体が自らの身体において生きることのできるセクシュアルな時間的体験の記述だという意義を引き出すことができた。このような文脈ゆえに、「生殖行為」のないセクシュアリティの記述が、「繁殖性」とは別の文脈で、全体性批判として機能するのである。

レヴィナスのクシアな読解は、サイモン・クリッチリーのようにレヴィナスの記述する主体を「性的倒錯」としてのマゾヒズムと素朴に措定してしまう(Critchley, 2015, 88-90)誤読とは異なった「展望」をもたらしてくれる。では、この「展望」の中で非性器中心主義的な性的身体というマゾヒズムの身体はどのような役割を果たすのだろうか。というのも、このような非性器中心主義的な性的身体は、セクシュアリティの特定の身体部位への局所化を、絶えざる快苦からなる両義的な欲望を伴った反復の中で拒む限りで、男女二元論あるいは性器二元論に基づいた形態学という現在も根深い神話では捉えることのできない性的身体の水準を指し示しているからである。ベルサーニがフロイトを介して示した「自己の安定性と揺ぎ無さ」が瓦解するマゾヒズムというセクシュアリティは、既存の男女という性差の規範からすり抜けつつ自己変容する性的身体の構造を可視化させる。このような性的身体を可視化させること、あるいは「ユートピア」として描き出すことで、レヴィナスがセクシュアリティの「展望」の一つとした「時間の観念の脱形式化」がより具体化＝身体化されるだろう。そしてこの作業はジュディス・バトラーが「フーコーと身体的書き込みのパラドックス」(1989)で述べる、規範がその上に常に書き込まれつつも、その規範の書き込みの条件である限りで「歴史と文化に対する抵抗の源泉」としての「前言説的で前歴史的な「身体」」(Butler, 1989, 607)をセクシュアルな水準で模索する作業となりうる。「展望」は常に規範化されるが、本論で見てきたようなフロイトのマゾヒズムが演じる「生成的な服従化」(Butler, 1989, 606)はその「無限に反復されるひとつの「ドラマ」」(ibid)を介して規範に内在化しつつ、その規範が存在しないものとして抑圧あるいは抹消している身体のセクシュアルな地平を描きうる。レヴィナスがエロスの水準として構想した「顔の彼方」の「ドラマ」(TI, 13-14)というマゾヒズムは、素朴に規範に対置されるものではなく、

このように規範に内在しつつ不断に展開される性的身体の可能性——あるいは死という全体性に抗した性的身体の「生き延び」を示唆している<sup>7)</sup>。本論ではこの可能性を示唆することで綴じたい。

以上

#### 参考文献一覧（著者姓アルファベット順）

- [1] Bersani, Leo, *The Freudian Body*, Columbia University Press, 1986
- [2] ベンサーサン, ジェラルド 「両義性と二元性——レヴィナスにおけるエロスのなものについて」(合田正人編『顔とその彼方』知泉書館, 2014 年より)
- [3] Bulter, Judith, “Foucault and The Paradox of Bodily Inscriptions” from *The Journal of Philosophy* vol.LXXXVI. No.11, 1989
- [4] Critchley, Simon, *The Problem with Levinas*, edited by ALEXIS DIANDA, Oxford University Press, 2015
- [5] Frank, Didier, *Dramatique des phénomènes*, PUF, 2001
- [6] Freud, Sigmund, *Drei Abhandlungen Zur Sexualtheorie, Psychologie*, Fischer, 2007[1905]
- [7] フロイト, ジークムント著, 渡邊 俊之、越智 和弘、草野シュワルツ美穂子、道旗 泰三訳『フロイト全集〈6〉0901-06 年—症例「ドーラ」・性理論三篇』岩波書店, 2009
- [8] 伊原木大祐 「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」(『基盤教育センター紀要 = Bulletin 23 号』北九州市立大学基盤教育センター, 2015 年より)
- [9] Katz, C.E., “From Eros to Maternity” from *Women and Gender in Jewish Philosophy*, Indiana University Press, 2004
- [10] 合田正人、村上靖彦 「外傷と病理の哲学へ」(『現代思想 3 月臨時増刊号：総特集レヴィナス』青土社, 2012 年より)
- [11] 古怒田望人 「老化の対人関係：レヴィナスにおけるブルーストから」(『フランス哲学・思想研究 23 号』, 日仏哲学会, 2018 年より)
- [12] 同 「トランスジェンダーの未来 = ユートピア：生殖規範そして「未来」の否定に抗して」(『現代思想 11 月号：特集反出生主義を考える』青土社, 2019)
- [13] 同 「レヴィナス現象学におけるセクシュアルな自己変容記述の解明」(『年報人間科学』41 号, 2020)
- [14] Levinas, Emmanuel, *De l'existence à l'existant* [1947] (Paris, Vrin, 2004)
- [15] 同 *Le temps et l'autre* [1948](Puf, 1983)
- [16] 同 *Totalité et infini* [1961] (Livre de Proche, 2012)
- [17] 同 *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Kluwer Academic Publishers, 1974
- [18] 同 *Et Dieu créa la femme from Du sacré au saint*, Minuit, 1977
- [19] 同 *De Dieu qui vient à l'idée*, Vrin, 1982
- [20] 同 *Entre nous Essais sur le penser-à-l'autre*, Figures/Grasset, 1991a
- [21] 同 “Leçon talmudique sur la justice”, 1974 from *Chier de L'Herne Emmanuel Levinas*, Livre de Proche, 1991b
- [22] 同 “Quelque réflexions sur la philosophie de l'hitlérisme” [1934] from *Les Imprévus de l'histoire* [1994], Livre de Proche, 2008)
- [23] 同 *Œuvres 1. Carnets de captivité suivi de Écrits sur la captivité et Note philosophiques diverses*, Grasset/Imec, 2009
- [24] 同 *Œuvres 2. Parole et silence*, Grasset/Imec, 2011
- [25] 同 *Œuvres 3. Eros, littérature et philosophie*, Grasset/Imec, 2013
- [26] Neuhaus, Marieluise, “La critique lévinassienne de Freud Inventaire”, from Neuhaus, Marieluise et Bercherie, Paul,

*Levinas et Psychanalyse*, L'Harmattan, 2005

[27] Noyes, K・John, *The mastery of submission : invention fo masochism*, Cornell, 1997

[28] 渡名喜庸哲『『全体性と無限』におけるビオス・スクルト・シリグの注から出発して—』(前掲『顔とその彼方』[2014]より)

## 注

- 1) この発言の当時の社会的な含意に関しては古怒田, 2020 を参照。
- 2) 例えば Katz, 2004、伊原木, 2015 を参照。またベンスーサン, 2014 はレヴィナスのセクシュアリティについて言及しているもののその記述自体には考察を加えていない。
- 3) このマゾヒズム的観点のプルーストからの影響については古怒田, 2018 を参照。
- 4) 確かに、この時期のフロイトはリビドーを身体的な水準から切り離している側面がある (cf. 『フロイト全集 6』, 2009, 451-452)。しかし、1905 年の時点で既にフロイトはリビドーを「性的緊張」と「満足の感覚」、この両義的な意味を持つドイツ語の「Lust」に翻訳できないか注の中で逡巡している (DAS, 37, 113)。つまり、1905 年の時点からこれまで見てきたような身体に関わるマゾヒスティクな興奮をリビドー論の内に見て取っているのだ。ベルサーニの言葉を借りるのならば、フロイトの研究は「精神分析的な身体の実存をテキスト上で纏めなおす」ものなのである (Bersani, 1986, 40)。
- 5) この論点のレヴィナスのセクシュアリティの文脈での詳しい考察は古怒田, 2020 を参照。
- 6) このようなユートピアとセクシュアリティとの関係については古怒田, 2019 を参照。
- 7) ディーディエ・フランク (cf. Frank, 2001) とジャン＝リュック・ナンシー (cf. Levinas, 2013, 9-30) がそれぞれレヴィナスのセクシュアリティの記述と「ドラマ」との関係について示唆しているが、その記述の内実はまだ踏み込むには至っていない。このドラマ (化) とセクシュアリティのレヴィナスにおける現象学的な立ち位置の解明については本論以降の課題としたい。

## **The Perspective of Descriptions of Sexuality in Emmanuel Levinas's Phenomenology of Eros through Freudian Psychoanalysis**

Asahi KONUTA

### **Abstract:**

Using Freudian psychoanalysis, this paper attempts to unravel descriptions of sexuality, which in his later years Emmanuel Levinas considered “perspectives to explore” in his phenomenology of Eros. Despite Levinas’s criticism of Freud, a theory of sexuality in Freudian psychoanalysis allows not only the embodiment of queer descriptions of the sexuality of Levinas, but also an understanding of the significance of these descriptions against a sort of totality. By demonstrating this point mainly on the basis of Leo Bersani’s *Freudian body* (1986), this paper explains how the descriptions concern a sort of “masochism” and points out the significance of this interpretation. In other words, through immanent and philological approaches showing one of the problems of sexuality, which Levinas called “perspectives to explore,” the paper clarifies what Levinas left as “perspectives” in his descriptions of sexuality.

**Key Words :** Emmanuel Levinas, Sexuality, Masochism, Queer, Freudian Psychoanalysis